



Title	ボクシングの社会学 : ジムの構造分析を用いて
Author(s)	池本, 淳一
Citation	年報人間科学. 2003, 24-2, p. 233-249
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3912
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ボクシングの社会学

——ジムの構造分析を用いて——

〈要旨〉

近年、スポーツ社会学や都市社会学において、ボクシングに関する諸業績が蓄積されつつあるが、その中でジムはボクシングサブカルチャーの分析上、重要な位置を占める。本論は、各先行研究の中で記述・分析されたジムとその環境との関係性に着目することにより、様々なボクシングサブカルチャー生成のメカニズムの解明を行う。

本論では、以下のことが考察される。

- 1) ジムとゲッターの関係に着目することにより、「役割モデル」を媒介にしたリクルートシステムと、その結果としての下層性の再生産のメカニズムを明らかにする。
- 2) ジムとストリートの関係に着目することにより、ストリートバイオリンスからの保護と、安全な男らしさの誇示の場を得ることがメンバーのジム通いの動機付けを作りだし、結果として、ジムとストリートが対立的な共存関係にあることを明らかにする。
- 3) ジムとリングの関係に着目することにより、育成システムとボクサ

ーの日常的な労働環境がもたらす、ボクシングの社会的な側面と搾取的な側面を明らかにする。

最後に、従来の先行研究が都市貧困とボクシングの繋がりを自明視しすぎたために、ボクシングを見る視点を固定化していた点を批判し、新たな視点の獲得のためには国際比較研究が不可欠であることを主張する。

キーワード

ボクシング、ジム、都市貧困、国際比較研究

池本 淳一

1、始めに ボクシング研究の変遷と本論の課題

近年、スポーツ社会学や都市社会学において、ボクシングに関する諸業績が蓄積されつつある。本論は、それらのレビューを通じて、ジムの重要性を確認し、ジムの制度的分析を用いて従来の諸研究の再構成を試みるものである。また、本論はその作業を通じて、ボクシングと都市貧困との根深い関係を具体的に明らかにすると同時に、その先行研究で前提とされたその関係自体が、ボクシングジムのステレオタイプ化されたイメージを再生産し、ボクシングに対する社会学的な視点を限定する結果となっていた点を批判する。

また、ボクシングに関する社会学的研究は、歴史文献研究と質的調査研究の二つの流れが存在するが、本論では現代のボクシングサブカルチャーを考察している後者のみを扱うこととする。では、これまでのボクシング研究の動向と、そこから導き出される本論の課題を提示することから始めよう。

社会学におけるボクシング研究は、1950年代にシカゴのボクシング関係者へのインタビュー調査を行ったS.WeinbergとH.Around〔Weinberg, Around, 1952〕によって始められた。彼らの研究は、ボクサーを一職業人と見なし、職業文化の面からボクシングにアプローチしたものであった。Beckerによれば、文化とは「一群の人びとが共通の問題に直面し、しかもたがいに効果的に相互行為とコミュニ

ケーションを行っているかぎり、その共通問題に照応して生ずるもの」〔Becker, 1963: 訳書117〕であると言う。ボクシングの共通問題は、対戦相手を直接傷つけ、また自分も傷つけられることによって生じる心理的な抵抗感や恐怖をいかに処理するか、であり、その解決のために、ボクサーたちは様々な職業文化を発展させてきた。特にこの論文では、それらのネガティブな感情を押しさえ込み、アグレッシブなパフォーマンスを引き出すために欠かせない「自己確信 (self-confidence)」が、迷信、歴代チャンピオンへの自己同一化、自信過剰等によって生み出されるメカニズムについて、詳しく論じられている。

また、これに続くものとして、黒人ボクサーへのインタビュー調査を行ったN.Hareの研究〔Hare, 1971: 3〕がある。この研究では、黒人選手を「我々の生きている世界における、人種的憎悪と社会経済的コンフリクトの産物」〔Hare, 1971: 3〕と見なし、「結婚」「家族」などの地位「引退後の再就職問題」などの、黒人ボクサーの生きる日常生活を詳しく記述している。これらインタビューに基づいた両論文は、職業世界と日常生活という、ボクサーの生きる二つの社会の姿を記述し明らかにした点で、重要な業績である。しかしながら、これらはしばしばその記述にのみ終始し、それがどのような社会的環境の下でいかなる社会的ロジックによって生じるのか、といった分析にまでは至っていない。

これらに対して、ジムへ参与観察を行い、彼らがボクシングに従事する日常の姿を描いたものに、J.Sugdenの研究〔Sugden, 1987〕があ

る。この研究では、上記の先行研究でもしばしば描かれていた、ボクシングの搾取的な側面が、いかにジムの制度、特にボクサーの育成システムと関わりをもつか、が分析されている（詳細は「池本 2003」（近刊）を参照）。

また、この研究に続くものとして、米国におけるブルデュー研究と人種問題研究の第一人者である、L.J.D. Wacquant の一連の研究〔Wacquant, 1992〕〔Wacquant, 1995〕がある。彼は、その初期のエスノグラフィー〔Wacquant, 1992〕においては、ジムとストーリーが対立を含みつつも共存関係にあることを解明し、その後〔Wacquant, 1995〕以降）は一貫して、ボクシングの理論的研究、特に、ブルデューの「身体資本」の概念を用いた研究を精力的に行っている。

これら両研究は、搾取の隠蔽メカニズムやボクシングがストーリーを不可欠の社会的背景とする社会的ロジック等の分析に成功している点で、ボクシング研究を記述から分析へと引き上げたものであると言えるだろう。

この両研究が、研究段階を引き上げること成功した一因は、参与観察により、ジムを考察の中心に置いたことにある。ジムは、そこに通うメンバーを通じて、ボクシングと様々な社会環境を結び付け、独自のローカルなボクシングサブカルチャーを生み出す場である。ゆえにその場への着目は、そのサブカルチャーが生み出されるメカニズムの発見を可能とするのである。

しかしながら、従来の研究では、ジム内のどのような制度的特徴

とジム外の社会環境が結びつくことで、いかなるサブカルチャーを生み出すのか、といった整理は行われていない。そこで本論では、先行研究の中で扱われたジムに関する記述と分析を、ジムに不可欠な三つの要素——新人のリクルート、ジム通いの動機付け、ボクサーの育成——と、ジムを取り囲む社会環境——ゲッター、ストーリー、リング——が結びつくことによって、いかなるサブカルチャーが生み出されるのか、といった視点で整理し、また、その記述と分析の根底にある「ジムのイメージ」を探り出すことを試みる。では、本論に進もう。

2、階層社会とボクシング——ゲッターとジム

ジムは、そのメンバーを安定して継続的にリクルートしなければならぬ。この章では、ジムが、都市貧困という比較的マクロなコンテキストにおいて、いかにそれを成し遂げるのか、について考察する。また同時に、この世代間を越えて作動するリクルートのサイクルが、ボクシングと下層社会との結びつきを再生産しつつある点について解明する。

はじめに、ジムがどのような環境の中にあるのかから見ていこう。例えば Sugden [Sugden, 1996] が参与観察を行った Memorial Boxing Club (以下MBC) は、コネチカット州・ハートフォードの「悪名高いゲッター」[Sugden, 1996: 2]の中に建つ、コミュニティ

センター内にある。このセンターでは、行政主権のクラブやレクリエーションが行われることはなく、その建物もすべての窓が割られ、壁には落書きが施されているという。しかしながら Sugden [Sugden, 1986] によれば、センター前のスペースはボールゲームのスペースとして利用されており、またセンター内の広間やエントランスは地域住民たちが入り込んで話し込んだり、また何をすることもなくぶらぶらするような場として有効利用されているという。このようなセンターの奥の地下室にMBCは設置されている。また、Wacquant が参与観察を行った [Wacquant, 1992] Stoneland Boys Club (以下SBC) は、シカゴの十六番街にあり、崩れかけた建物にはさまれるように建てられている。

上記のようにこれらのジムは、都市の中でも、上流階層の住む高級住宅街や国家の都市計画によって画然と整理された区域に立てられているのではない。ジムは労働者階層が主な住人であり、しばしば社会的に不利な立場におかれたエスニシティや人種が集住して住むゲットーの直中、いわゆる都市貧困地域に建てられているのである。そこは国家や経済的發展に半ば見捨てられた、いわゆる遷移地域であり、そのような大都会のエアポケットにジムはひっそりと建てられているのである。

そして、ジムにやってくるメンバーも大半がその近隣からやってくる下層労働者階級の人々である。例えば、1950年代に Weinberg [Weinberg, Aroud, 1952:460] が調査したシカゴの68人のボクサーのうち、ミドルクラス出身は2人だけであり、他はすべて下層階層

出身であった。しかしながら、二十年後に再びシカゴの黒人ボクサーを調査した Hare によれば、「最も貧しい少年はファイターもまたならない」[Hare, 1971:4] という。そして現代のシカゴ在住の現役プロボクサー27人（うち白人は2人、残り15人は黒人）を調査した Wacquant によれば [Wacquant, 1992:232]、彼らも下層労働者階層出身であることに変わりはないが、ほとんどは高校卒業以上の学歴を持ち、低額ながらも安定した収入源（調査対象者の半分はマネージャーから週払いの給料にて生計を立てていた）を確保していたという。つまり、ジムに通うボクサーは下層階層の中でも最下層以上の生活を送っている人々なのである。

Wacquant によれば、最下層の人々がジムに訪れないのは、ボクシングにかかる費用が用意出来ないためではなく、彼らが「ピュージリズムに客観的に要求されるハビトゥスと資質を欠いている」[Wacquant, 1992:232] ためであるという。例えばSBCでは、年会費は10ドルにすぎないし、練習道具はほとんどジムで貸し出しているため、金銭的には最下層の人々でも通うことは可能である。しかしながら、「ボクサーになるためには規則正しい生活をおくること、ある種の（特に時間についての）規律化、身体的・精神的禁欲主義が必要とされ」[Wacquant, 1992:232]。これらは、最下層という「過度に不安定性で時間にルーズな社会的経済的環境に生きるものには身に付きようがない」[Wacquant, 1992:232] ものであるために、彼らがボクシングを身に着けることは出来ないのである。

では、最下層以上の生活を送る者達が、ボクシングを始めたとき

かけはどのようなものであるか? Weinberg によれば、「あるインディアンと黒人のハーフの青年は、彼がストリートファイターで二人の白人を打ち負かすのを目撃したトレーナーによって、ボクサーになることを促された。他のボクサーは、他の少年達から「いくじなし (sisy)」と呼ばれたために、常にケンカをしていたと認めた。三番目のボクサーは、彼が小さく他の少年が彼をいじめたために、戦いつづけていた」[Weinberg, Aroud, 1952:460] 等といったさまざまな理由が存在するという。

しかしながら、もっとも一般的な理由は、あるボクサーが語った次のようなものであろう。

「オレが初めてジムを訪れたのは十二才の時だった。もし近所にファイターがいるのなら、子ども達はつねに彼を尊敬したもんだ。なぜなら子ども達は彼がタフな人間だと思ってたからさ。オレの近所には一人のアマチュアボクサーがいたが、彼はオレ達にとってある種ヒーローだったんだよ。」[Weinberg, Aroud, 1952:461]

また、Hare [Hare, 1971:4] が調査した58人のボクサーのうち、兄弟や親戚、近所の知り合いなど、身近なボクサーに憧れてボクシングを始めたのが31人と過半数を超えており、その腕っ節を試すためにジムに通い出したのは、約四分の一に当たる13人にしか過ぎなかったという。つまり、多くの少年達が知り合いのボクサーに憧れて、ジムへとやってくるのである。

さらに Weinberg によれば、ゲッターというコンテキストにおいては、ボクサーは単なる憧れ以上の存在であるという。それは、次のある伝説的チャンピオン“シユガーレイ”ロビンソンのコメントからも伺えるだろう。

「俺はデトロイトに引越すまで、ボクシングなんてやったことなかったのさ。俺はすげーちっちゃかったんだ。けど興味はあったんだ。なぜって?俺は同じブロックに住んでいたゴールデングラブ大会のチャンピオンに、すげー憧れてたのさ。俺は彼がトレーニンクしてるのを見るために、一日中ブラウスターセンタージム (Brewster Center Gym) の周りをうろついたもんだ。彼の名前はジョー・ルイス。ジョーがジムにいるときはいつでもそつしたもんだ。彼は俺のアイドルで、今だってそうさ。俺はずっと彼みたいになりたいって思ってたのさ」“Sugar Ray” Robinson, “Fighting Is My Business,” Sport, June, 1951:18 [Weinberg, Aroud, 1952:461]より転記)

このように、少年達がプロボクサーや優れたアマチュア選手とごく身近に接することが出来るという点は、ジムのリクルートにとって非常に重要である。

ボクシングは他のスポーツと同様に、ジュニア、アマチュア、プロフェッショナルといった、年齢や実力にそった各キャリアが存在し、そのキャリアごとの社会化や訓練システムが存在する。しかし、

他の多くのスポーツの場合、「職業的社会化の各段階が比較的独立した組織」[Sugden, 1987:202]で行われ、各段階のキャリアの者は別々の練習場で練習するのが一般的である。また、選手はキャリアや成績が上がれば地元の練習施設を離れ、そのキャリアや成績に応じた専門の練習場にて練習を行うようになる。

それに対して、ボクシングはすべてのキャリアが同じジムという練習場で一緒に練習を行い、またキャリアが上がっても、元々通っていたジムで練習を続けるのが一般的である。このジムの、各キャリアの総合育成という制度的特徴のために、ボクシングでは有名選手が地元に残り続け、またジムではまったくの初心者と世界チャンピオンが隣り合ってサンドバックを叩く、といった稀有な現象が生じるのである。つまり、ボクサーは近隣住民にとってごく身近に接することが可能なスポーツ選手なのである。

こうして、ジムや近所で身近に接するボクサーは、遠く離れた単なる憧れの対象を越えて、その練習方法から日常生活まで、なにからなまでに模倣すべき対象となりうるのである。すなわち「成功したアマチュアやプロボクサーは、スラムの少年たちにとって、はつきりと目に見える役割モデルを供給」[Weinberg, Aroud, 1952:460]する人物の一人なのである。

また、ボクサーの側でも、積極的にこの役割モデルを受け入れ、彼らの日常生活の中で「ボクサーらしく」振舞うという。その理由は次の事例から伺い知れるだろう。

「誰かがアンタをノックダウンさせるだろう？それから起きあがっ

ていい試合を見れば、観客はアンタを拍手喝采するだろうよ。夜にナイトクラブに立ち寄れば、みんなアンタのことを知ってたぜ。そしてクラブの司会者が言うのさ、「今夜はステキなお客様がお見えになってます。」ってね。それからスポーツライトを浴びるんだ。そりゃあサイコーの気分だつてこと、アンタにも教えてやりたいね」[Hare, 1971:5]

また、しばしば引退した優れたボクサーの名前が、地元の酒場やラウンジの屋号になっている [Weinberg, Aroud, 1952:469] 点からも、彼らがいかに地域に密着したヒーローであるかが伺えるだろう。このように、ボクサーは地域住民からの賞賛を受ける存在であるために、プロボクサーはその賞賛にふさわしいように、「地元にいる限り、彼の行動と習慣をボクサーとしての役割に適応させる。地元である程度の尊敬が得られるなら、彼はもはや単純労働を行う非熟練労働者ではない。彼は賞賛され、しばしば小さなグループを持つ。そして彼が稼いでいるか否かに関わらず、彼はおしゃれを始め、そして地元の名士としての自分を意識するようになるのである」[Weinberg, Aroud, 1952:462]。そしてしばしば、この賞賛を得る」と自体が、ボクシングを続ける動機となるという。事実、Hare の調査した殆どすべてのボクサーは、初めはただ金の為にプロボクシングを始めたと述べていたが、それでもそのうちの45%の選手は、「三年かそれ以上過ぎると、私は金銭的な報償よりも、認知度と名誉を好むようになった」[Hare, 1971:5]と述べており、それがリングに上がり続ける動機になったという。またこのことから、ボクサーが

地元に残りつづけるのは、上級キャリア専用のジムが他所にないためだけではなく、地元での賞賛自体がボクシングを続ける動機の一つとなつていからであると言えらるだろう。

しかしながらボクサーは、その賞賛を維持するために、多くの負担を強いられるという。あるボクサー曰く、「ファイターがより高いレベルの試合をすればするほど、みんながそいつの周りに群がるようになるんだ。で、そいつはそいつらを連れまわすのに金を費やされるってわけさ」[Hare, 1971:5]。すなわち、知名度が上がリ、取り巻きの増えた分だけ、彼らはより多くの出費を必要とするようになるのである。そのため、ボクサーが地元の名士にとどまる限り、フアイトマネーを貯蓄に回し、引退後に備えることは難しい。事実、Hareが調査した、引退した48人の元選手の内でも、試合で稼いだ金の大部分をいまだに所持しているものは一人もおらず、三分の二は少しは残していたが、残りは全く持っていなかったという[Hare, 1971:5]。

しかもプロボクサーという職業は、成功したところで中産階級や上流階級とのコネクションが出来るわけではなく、また、たとえ彼が上層社会に運良く入り込んだとしても、そこにとけ込むことは非常に困難である。例えば、上層階級の社会に入り込むうえでもっとも有効な手段は、上層階級の女性と家庭を持ち、その家族や友人とのネットワークを形成することであるが、それに成功したボクサーは数少ない。確かに、高校中退の元ヘビー級チャンピオン、ジョー・ルイスがある著名な女性弁護士と結婚したり、同じくブルック

リン出身のマイク・タイソンが王者獲得後、数多くの女優と浮き名を流したことからもわかるように、成功したボクサーが、しばしば自分よりも教育水準が高く育ちのよい女性と結婚した事例は数多く存在する。しかしながら、その結婚は多くの場合、生活習慣や友人関係の相違に基づく「階級的なコンフリクト」[Hare, 1971:6]を引き起こし、失敗に終わってしまうのである。

結局、ボクサーは現役時にしか稼げず、またそのフアイトマネーも自らの地位の維持のために使い果たしてしまうために、引退後、経済的な上昇を果たすことは難しい。また、彼らはたとえ有名になつても、中・上層階級とのネットワークを構築することが出来ないために、社会的な上昇を果たすことも出来ない。こうして、ジムのボクサーは、ほんの一時だけ地元の有名人として脚光を浴びるが、引退後はしがた非熟練労働者に戻ってしまうのである。

この一連の下層性の再生産のサイクルに、各キャリアの総合育成というジムの制度的特徴が決定的な役割を果たしていることは、次のキューバの事例からも裏書きされるだろう。

キューバはプロボクシングが禁止されている反面、世界有数のアマチュアボクシング大国である。Sugden [Sugden, 1996]によれば、その選手育成は、体育高校、体育大学等の教育制度と結びつくことで達成されているという。そのため、キューバでは優れた選手は各種の高等教育機関に進学し、地元を離れていくのである。そして引退後は、「コーチやスポーツ振興の事務員などとして、スポーツや身体教育システムの中での雇用が保障」[Sugden, (1996):145]される。

とにより、都市下層出身のボクサーの社会上昇が果たされるのである。つまり、上級キャリアの練習施設が高等教育機関という上層社会の中にあり、キャリアの上昇とともにスムーズにその中にとけ込むことが可能なために、キューバにおいては、ボクサーの下層性の再生産は起こり得ないのである。

ゆえに、ジムの各キャリアの総合育成という制度的特徴は、ボクサーの下層性の再生産にとって決定的な要素である、といえるだろう。

こうして、ゲットーに住む少年たちは、ボクサーを「役割モデル」と見なすために、ジムの門を叩くのである。そしてボクサーとなった元少年は、今度は自らが「役割モデル」を引き継ぎ、また次代の少年をジムへと引き込むのである。しかしながら、ボクサー自身はゲットーに留まり続けるために、経済的・社会上昇を果たせず、引退後は下層労働者として生きていかざるを得ない。このような一連のサイクルにより、ジムはメンバーのリクルートを確保し、またボクサーの下層性は再生産されていくのである。

3、暴力と男らしさのジレンマ——ストリートとジム

ジムは、ジムに入会したメンバーに、そこに通い続ける動機を提示しなければならない。この動機は、ジムに通うメンバーが生きる日常世界の中で、ジムが果たす社会的機能から生み出されるもので

ある。この章では、都市貧困の中での日常生活という比較的ミクロなコンテキストにおいて、ジムが担う社会的機能について考察する。また同時に、ジムとストリートが対立しつつも共存し合う関係にあることを指摘する。

まずは、ジムのメンバーが生きる生活環境から見ていこう。例えば、Wacquant が調査したSBCは、強盗、殺人が絶えない地域であり、それはこのジムに通う少年に「ここらは『人殺しの街(Murdertown)』なのよ」[Wacquant, 1992:228]と言わしめるほどである。それゆえ、この地域に住む男たちは「彼らの昼食代やコート、または自らのストリートでの名声を守るために、また、単におらぶらぶらするために、ストリートで闘いに揉まれながら成長する」[Wacquant, 1992:229]のである。

ジムはこのような危険なストリートに接して建てられているために、何らかの自衛手段を練らねばならない。例えば、SBCでは、入り口には金属のバーが、窓には鉄格子がはめ込まれており、ジムの至る所にはならず者を撃退するための金属バットや、電気警報システムが設置されており、自らを「要塞」[Wacquant, 1992:228]化しているという。

また、ストリートでの暴力事件や犯罪に巻き込まれないように、ジムではメンバーにストリートでの人間関係や生活を持ち込めむことを強く禁じている。Wacquant によれば、ジムには「ジムの中に外部での自分の義務や問題——家庭や仕事、恋愛など——を持ち込ま

ない、という暗黙のコード」[Wacquant, 1992:23]が存在しており、お互いのプライベートを詮索しないという、いわば「暗黙の不可侵条約が個人間の関係を支配している」[Wacquant, 1992:23]と言っている。しかしながら、そこでの人間関係はけっしてドライなものではない。あるボクサーは、そのジムの雰囲気を次のように語っている。

「そこは第二の家庭のようさ。知ってるかい？あなたはなにか助けがほしくてそこにいくことも出来るんだぜ。もしあなたが落ち込んでたなら、励ましてくれる誰かがそこにはいるんだ（19才、現役高校生）」[Wacquant, 1992:229]

Wacquantによれば、ジムのフロアでは、このような家族的な友愛関係が存在しており、「それは目配せや微笑み、『練習後』の雑談や冗談や励まし、そして愛情のこもったタップ（お互いのクラブ同士を打つこと）、儀礼的に挨拶する行動）を通じて表現される」[Wacquant, 1992:239]（括弧筆者注）という。

つまり、ジムはゲットーにおいて、「規律と安定性の孤島を作り上げているのであり、そこでは外においては許されないであろう社会関係が再び可能になるのである。ジムは、守られた社交のための、比較的自己閉鎖的な場所を提供しており、そこではストリートとゲットーのプレッシャーは一時的に中断し、外部での出来事は滅多にジムには影響を与えることにならぬ」[Wacquant, 1992:229]である。このようにして生成したジムのコミュニティの中で、「ボクサー達は同じ小さなギルドでのメンバーシップを共有している、という事実を喜ぶ」[Wacquant, 1992:239]であり、多くのメンバーにとって、

このコミュニティへ所属することそのものが、ジム通いの動機付けとなっているのである。

ジムは、こうしたストリートとの物理的・社会的切断によって、安全で平和な独自のコミュニティを作り上げているのであるが、それでも、ジムはストリートから完全に離れては存在できない。特に、ジムの次代を担う少年達のジム通いの動機付けを維持するために、ストリートは不可欠である。

ゲットーに生きる少年達にとって、ストリートバイオレンス、特に彼らの同世代同士で行われるギャング抗争やケンカは、彼らにとって自らの勇気と力強さを示すチャンスである。彼らはそこで活躍を通じて、男らしさを表現し、仲間内での「タフガイ」としての地位を築いていくのであるが、体格の劣る少年達はそれらストリートの荒事では活躍する機会を得られず、一向に尊敬を集めることが出来ない。しかしながら、「これらの若者は、ボクシングサブカルチャーの中でなら、彼らが尊敬を勝ち得るチャンスが与えられている」[Sugden, 1996:54]のである。すなわち、同一体重で戦うリングでならば、彼らは自らの勇気と力強さを十二分に表現しうるのであり、そのため、彼らにとってジムは唯一自らの男らしさを誇示しうる場となるのである。

また体格に関わらず、都市貧困地域で生きるすべての少年たちにとって、このような場が用意されている点は大変重要である。通常、ゲットーで生きる少年達は、なんらかの形でストリートギャングと

の関わり合いを持ち、そこでの活躍を通じて「タフガイ」として名を上げ、ストリートでの尊敬を勝ち得ている。しかしながら、Sugdenによれば、「彼らは年を経るにしがたい、拳での戦いがナイフやしばしば銃による小競り合いに取って代わられるようになるにつれて、深刻な怪我を負う確率は高まり、掛け金は上がってゆく」[Sugden, 1996:65] ために、男らしさの表現と身の安全を守ることのジレンマに悩まされるといふ。このようなストリートで生きる少年達にとって、スポーツとしてはもつとも危険で苛酷であり、勇気と力強さを表現出来る拳のファイトは、彼らのこのジレンマにある種の解決を与えるものなのである。つまり、ジムはすべての少年達にとっての、男らしさの誇示と安全性の確保のジレンマの解決を提供してくれる場なのである。

また、ジムに所属することで、ギャング団自体から距離をとることが出来る点も重要である。ジムはすべてのギャング団から中立を守りつつ、またギャング団自体から(彼らと同様の)「タフガイの集団」としての評価を得ているために、ストリートの政治の中で第三者的な立場を貫くことが可能なのである。^(注1)

結局、ゲットーの少年たちにとって、ジムは通常ならストリートギャングが担う社会的機能——同性同世代集団における男らしさの誇示——の、安全な代替物を提供してくれる場なのであり、言うなれば、彼らはボクシングという荒々しいスポーツを通じて男らしさを誇示しあう、スポーツギャング団の一員なのである。

上記のように、ジムはストリートの暴力と人間関係を遮断して、メンバーを保護しつつも、ストリートとは肉体的な暴力性を尊ぶ男らしさの文化を共有している、という点で、「共存的な対立(symbiotic opposition) 関係」[Wacquant, 1992:221]にあると言えらるだろう。

4、搾取と自己実現——リングとジム

ジムは、その身に着けた技術を表現するための場としてリングを、そしてそこにボクサーを送り出すための育成システムを必要とする。この章では、ジムの中のボクサーとしての日常生活が、外部での日常生活と如何なる関係にあるのかを、各育成段階毎に考察する。また同時に、リングを労働の場と捉えることにより、都市貧困というコンテキストにおいては、そこが搾取と自己実現をもたらす場であることを指摘する。

では、ジムでのボクサー育成の各段階を追いつつ、そこに含まれる社会福祉的、及び搾取的な側面について見ていこう。

Sugden [Sugden, 1987]によれば、ゲットーの少年達は、ごく幼い頃(10〜14才程度)からジムに出入りしており、彼らは「ジュニア」と呼ばれるキャリアに属している。しかしながら、ジムでは彼らジュニアを育成するための体系的なプログラムも、また育成専門のスタッフも存在しない。彼らのほとんどは、先輩ボクサーの

動きを見よう見まねで真似たり、または親切なプロボクサーのアドバイスによってその技を磨いていく。こうして、ボクシングの技術は特定の指導者や体系的なプログラムによってではなく、ジムのメンバーを通して子ども達に教えられるのである。ゆえに、ボクシング技術を身に着けるためには、彼らはジムの新メンバーとして、ジムという社会の中での習慣や考え方を身に着けなければならぬのである。

こうしてボクサーとして、そしてジムの住人として幼少期からの「社会化」を受けた少年達のうち、成長して幾人かがアマチュア選手となる。少年達はこのキャリアの中で、後のプロの基本となる技術をたたき込まれるのであるが、また同時に、アマチュアとしてより多くの試合に参加して実績を積むことは、後のプロ転向のさいにも重要な要素となる。アメリカやその他の多くの国々では、一般的にプロボクサーはマネージャーにスカウトされることで、始めて興業に参加できるようになる。そのため、少しでも良いマネージャーや契約金を得るためにも、このアマチュア時代の戦績は非常に大切なものとなるのである。ゆえに、このような制度のある国々では、実績豊かなアマチュア時代を過ごし、オリンピック出場経験持つことが重要なこととなる。

また、これらジュニアやアマチュアのキャリアにある少年にとつて、ボクシングは多くの社会福祉的な側面を持つ。例えば、Sugden [Sugden, 1996:183]によれば、北アイルランドのホーリーファミリークラブに通う少年達の親は、しばしば積極的に息子達のジム通い

を奨励するという。北アイルランド、特にジムのあるベルファストのニューロッジは、セクト闘争が激しい場所であり、その闘争の舞台の一つが、町中のストリートである。そこは敵対セクトからの狙撃や強襲にさらされる戦場であり、若い男達はその格好の標的とされるのである。つまり、「ニューロッジでストリートに走るということとは、ある種の危険な所業であり、かつ、死にいたることさえあろう」[Sugden, (1996:101) 危険性をもつのである。そのため、年頃の少年を持つ親にとっては、家に寄りつかなくなった彼らの行き先や遊び場所が安全であるかどうかが大変気をもむ問題となるのである。そのような少年を持つある母親は、Sugden に以下のように語ったという。

「わたしは子供達が外に出ていった時には、あの子たちはどこにいったのかしら、と気をもみながらじっと座って時計をにらんでいます。・・・わたしは、誰かがあの子たちを傷つけやしないか、銃で撃たれやしないか、といつも心配しています」[Sugden, (1996:104)]

このような少年の身を案じる保護者にとって、ジムは、そこに通っている間は彼らの子供達の身をストリートから引き離し、結果的にストリートバイオレンスから少年を守る一種の保護施設となるのである。また、Weinbergら [Weinberg, Arond, 1952:461]によれば、アメリカのゲッターにおいても多くの練習生がジムには元ボクサーの父親や叔父によってつれてこられたという。かの地のストリート

もドラッグやアルコール、窃盗やギャング間の抗争など、北アイルランドのストリートと同様に青少年の育成にとって好ましいとは言えない場所であるため、機会があれば保護者達は少年達にジム通いを勧めるのである。

また、ジムにおいても、その各キャリアの総合育成制度は、少年達の非行防止に積極的な役割を果たす。「ジャックローラー」[Snow, 1998]等で描かれたように、少年達の非行には、同世代の仲間集団やギャング団の影響が大きい。すなわち彼らは仲間から「いくじなし」と見なされたくないために、ドラッグや盗みに手をだし、しだいに本格的な犯罪に手を染めてゆくのである。ジムに集まる少年達も、常に仲間集団からの同様の誘惑にさらされている点で変わりはないが、しかしながら、彼らがストリートギャングに所属する少年達ともっとも大きく異なる点は、ジムという、大人も大勢集まる場を溜まり場に行っている、という点である。通常、ゲットーのギャング集団は、同姓同世代の少年達だけで形成され、そこに大人が入り込む余地はなく、むしろ大人に対して敵対的な態度をとることで、自分達の凝集力を高めてさえる集団である。しかしジムでは、スポーツギャングたちは常に成人のプロボクサーやアマチュアに囲まれており、また、ジムの大人は彼らのもっとも尊敬すべきタフなボクサーたちである。ゆえに、親や教師の警告を無視する少年達も、ジムの大人達の警告には素直に従うために、彼らが深刻な非行に走ることはないのである。

このように、ジムは保護者達には、少年達の保護施設としての機能を期待されているのであり、ある種の社会福祉的な側面をもつ施設となっているのである。しかしながら、少年達が成長してプロとなり、リングという別の世界に足を踏み入れた途端に、彼らはマネージャーたちによって搾取される存在となるという。例えば Weinberg らによれば [Weinberg, Aroud, 1952:467] 法的にはファイットマネーの三分の一がマネージャーの取り分であるにも拘わらず半分以上が奪われたり、新人や戦績の振るわない選手が明らかに不利な相手との対戦（いわゆる「噛ませ犬」）を強いられたり、充分な調整期間を与えられずに、穴埋めや代役としてリングに立たされることさえ強いられるという。

マネージャーが搾取的な立場に立てる理由は、第一に、彼らがいわゆる「ギルド」を作って組織化している点があげられるだろう。つまり、マネージャー全員が「グル」になって、選手があるマネージャーから逃げ出そうとしても、そう簡単には他のマネージャーを見つけられないようにしているのである。また、ボクサーの方もかつては「労働組合」のようなものをもってはおらず、昔あるボクサーが選手組合をつくらうとしたさいには、あつと言つ間にこの業界から「抹殺」されたという [Weinberg, Aroud, 1952:466] 第二に、多くのマネージャーたちは彼らの選手を金銭的欠乏状態に巧妙に追い込むことで、彼らをコントロールしようと試みている点が上げられるだろう。例えば、「幾人かのマネージャーは、選手が手に入れたファイットマネーを浪費するのをあえて止めようとせず、また、マネ

ージャーから金を借りることを選手に勧めさせるのである」
[Weinberg, Aroud, 1952:467] この結果、ある者は自分の借金の返済のために試合をこなし、またある者は引退後、現役時代の税金の未納入分を支払うただけに、再びリングで老体をさらすこととなるのである。

これらの明らかに不利な労働条件があるにも拘わらず、ボクサー達からその条件改善の声が上がることは少ない。なぜこのような搾取的な関係が（マネージャーのさまざまな策略があるとは言え）ボクサーたちの間で黙認されているのであろうか？

その謎を解く鍵は、上記の幼少からじつくりと時間をかけて行われる育成システムにある。すなわち、ごく幼いジュニア時代からジムの住人として社会化されたボクサーたちは、先輩達の価値観や振る舞い方をも自然に内面化しているために、先輩達がマネージャーから受ける不当な扱いすらも、ごく自然なジムの風景として受け取ってしまいがちである。それはあまりにも日常的で「当たり前」な光景であるために、その不当性を反省し、異議申し立てすることは難しい。

また、ボクシングをゲットーというそもそもが搾取的な環境の中で行われる職業として見た場合、それは他の職業に比べて決して見劣りするものではないため、その搾取性を自覚することは難しい。Liebow [Liebow, 1967]によれば、ゲットーの成人黒人男性は、レジ打ちや洗車係、皿洗いのような低賃金の常勤職か、建設作業員など

の比較的賃金は高いが、雇用が不安定な肉体労働に従事しており、しばしば「自己実現の見込みのなさ」[Liebow, 1967: 訳書34]を経験するという。すなわち、「彼の収入は雇い主にとつての彼の労働の価値を公に評価するものであり、同時に他の者にとつても彼にとつても、彼の人間としての価値を測るさいに重要なもの」[Liebow, 1967: 訳書27:28]であるため、低賃金の労働は彼に低い自己評価しか与えないのである。またたとえ重労働に耐えうる体を持ち、ゲットーで比較的裕福な暮らしをしていたとしても、それらの多くは非熟練労働であり、熟練工や上役への出世の見込みもないために、自己実現にはほど通いという[Liebow, 1967: 訳書35]。結局、「レストランで

の給仕人見習いや皿洗いは、巧みに交渉すればひよつとするとレストランのシェフやマネージャーになれるかもしれない、といった出世街道に乗つてはいない。一生懸命働いた給仕人見習いや皿洗いは、単によく働く給仕人見習いか皿洗いになるだけである」[Liebow, 1967: 訳書2]のために、仕事に打ち込む充実感や達成感をそこから得ることは出来ないのである。こうして彼の目には「非熟練のうんざりする仕事には何の希望も見いだせないために、金と名誉につながるボクシングは大変魅力的に見える」[Weinberg, Aroud, 1952:46]のである。

また、ボクシングを臨時雇いのパートタイム労働として見た場合には、それは必ずしも割りにあわない職業とは言えない。ボクシングの練習は早朝の自主的なランニング以外は、一日に二時間から二時間程度、たいてい夜に行うものである。ゆえに、ファイトマネー

だけで生活できる上位ランキングのボクサー以外、つまり実質的にはほとんどのボクサーは、自由になる昼間に、他の本業としての職業をもつパートタイムボクサー[Weinberg, Aroud, 1952:463]なのである。彼らにとつては、ピンハネされたファイトマネーは、それでもアフター5の空き時間を利用して得られる、少ない賃金を補う臨時のボーナスなのである。

こうして、ジュニア、アマチュア、プロと進む「このプロセスの、根本的に搾取的な本質は、アマチュアリズム、社会福祉などのレトリックや、段階的な手法——彼らが、ボクサーの職業的役割の中で(ジュニア、アマチュア、そしてプロと順に)育っていくことを進められるこの育成システム——によって、ボクサーたち自身には隠され」[Sugden, 1996:88]、また彼らのゲッターにおける不利な労働環境を背景として、マネージャーたちはボクサーの搾取を成功させるのである。

上記のように、ジムは、幼少・少年期の少年をジュニア・アマチュアとして育成システムに取り込んでいる限り、ストリートから彼らを引き離し、大人の監視下に置くことで、非行に走るのを食い止める役割を担っている。しかし、幼少期から時間を掛けて進められるその育成は、プロボクサー達にその劣悪な労働条件を無自覚のままにさせておく役割をも担っているのである。

しかしながら、彼らにとつては、リングに上がることは自己実現をもたらす唯一の労働なのである。つまり、ゲッターというリング

よりも劣悪な労働環境の中にあるからこそ、一般社会から見れば搾取的で自己破滅的なボクシングという職業が魅力的に見えるのである。その住民にボクシングを熱烈に希求させるのである。それゆえ、ジムはゲッターを必要とし、またゲッターはジムを必要とするのである。

5、おわりに ジムイメージと国際比較研究

最後に、本論での成果を整理し、今後の課題を提示しよう。

本論で示したように、ジムの諸制度を通じてボクシングサブカルチャーを生み出す母体となったのは、都市貧困というコンテクストの中にあるゲッター、ゲッターでの生活の場であるストリート、搾取と自己実現をもたらす労働の場としてのリング、といった都市貧困と密接に結びついた社会環境である。もつとも、多くの映画や小説を通じて、都市貧困と、そこでの支配的な文化である男らしさの文化がボクシングと密接な繋がりをもっていることは、我々のよく知るところである。しかしながら、「なぜ、そしてどのように、男性文化と都市貧困が、プライズ・リングと固い繋がりをもって現れるのか、については、我々は曖昧にしか知らなく」[Sugden, 1996:56]のが実状である。このような我々が漠然ともつボクシングイメージを反省するために、本論で扱った先行研究の数々は、その関係性を具体的に綿密に記述・分析したものであり、本論はそれらを整合的に結びつける枠組みを提供したものであった。この点においては、

本論を含む従来のボクシング研究の方向性は、社会学的な研究の王道の一つ——ある現象を見る偏見や思い込みで満ちた視点自体を、具体的・詳細な事実の積み重ねによつて自覚的に捉えなおす試み——にそうものであつた、と言えるだろう。

しかしながら、この方向性には、さらに深いレベルでのイメージと視点の硬直化を伴なう危険性が存在する。つまり、従来のボクシング研究では、都市貧困とボクシングの繋がりを解明することに焦点が当てられていたために、相対的に都市貧困以外の社会的背景とボクシングの繋がりが軽視されがちであつた。

特に、アメリカの大都市のボクシング研究においては、その都市貧困と言う社会的背景が圧倒的なリアリティと説明力を持つがゆえに、他の社会的背景を見落としがちとなる。ゆえに、他の社会背景とボクシングとの繋がりを自覚するためには、アメリカとは大きくコンテキストの異なる地域のジム研究が必要となるのである。

その課題にいち早く答えた研究として、J. Sugden の [Boxing and Society: An International Analysis] がある。これは、上記のアメリカゲッターの他に、北アイルランド、キューバのエスノグラフィを加えたものである。この研究では、人種差別、階級格差、政治的コンフリクト、社会体制等の社会背景が、ボクシングと結びつくことで様々なサブカルチャーを生み出している様子が詳細に描かれており、結果として、この研究は都市貧困以外の視点の獲得に成功していると言えるだろう。また、例えばキューバボクシングが栄えた原因が、一国内の都市貧困であるよりも、グローバルなレベルで

の経済格差にあり、またこの国のボクサーのほとんどがアフリカ系キューバ人であるのは、表面上は払拭されたかに見えるキューバにおける黒人差別がまだ根深いためであること等を指摘することにより、ボクシングサブカルチャーの社会的背景には常に何らかの形の「貧困」や「不平等」が存在することが指摘されている。言うなれば、この国際比較研究からは、ボクシングは隠蔽された微細な差別や不平等、そしてそれに起因する社会的な不満足を明るみに出す機能を持つスポーツであることが読み取れるのである。つまり、国際比較を中心とした制度論的分析は、ジムを見る我々自身の視点の分析でもあり、また、我々がボクシング以外の場では見過ごしてきた社会的環境——貧困と不平等——を自覚させるものである。

このような国際比較研究の流れを受けて、筆者は現在日本のボクシングジムのフィールドワークを行っている。そしてその分析の出発点は、やはり我々日本に住むものが持つ、ジムへのイメージを自覚的に捉えなおすことであろう。例えば、調査中、筆者は次のようなジムへ入会するさいに感じたある種の不安や戸惑いを耳にすることが多い。

「最初、ジムにいくのかなりビビってましたわ。ふざけたヤツ来たわ、思われて、入会金と月謝払ったら、後はほこほこにされてまう思っていましたわ。」

(30才・事務職・キャリア5年)

また、高校時代から空手や中国武術に親しみ、格闘技関係の友人

を少なからずもつ筆者自身ですら、初めてジムへ訪れたさいのフィールドノートを読み返すと、ずいぶん「びくびく」していた様子が伺える。つまり、このようなジムに対する我々のイメージを手がかりに——先行研究が都市貧困というジムイメージを手がかりにしたように——日本におけるボクシングサブカルチャーが、いかなる社会的不平等と日常への不満足によって生産・再生産されているのかを明らかにしていくことが、筆者が自らに課す今後の課題でもある。

(注)

(一) このようなジムの社会的機能は、北アイルランドの有名なブレミリタリー(民間の武装集団)が、男らしさをアピールする場となっている場合では顕著である。Sugdenによれば[Sugden, J(1996)]かの地では、ストーリーでの荒事イコール銃撃戦でもあるために、男らしさのシレンマはのびきならぬ問題となる。そのため、安全な男らしさの表現の場としてジムの存在意義は非常に大きい。また、ジムはブレミリタリーからは中立不可侵の立場にあるために、彼らの標的となる人物——刑務官や警察、セクト主義的なラグビーなどのスポーツ関係者——は、ジムの経理や後見人となることで、身の安全を確保することが出来るという[Sugden, J(1996):65]

文献

Becker, H. S., 1963, *Outsiders: Studies in the Sociology of Deviance*, New York: The Free Press, (村上直文訳, 1993, 『新装 アウトサイダー

ーズ』, 新泉社)

Hare, N., 1971, 'A Study of the Black Fighter.' *Black Scholar*, 3, November: 2-9.

池本淳一, 2003, 『シンローマン・ロリンソンのためのエスノグラフィ——』, Sugden 『Boxing and society: An international analysis.』を事例として「——」, 『スポーツ社会学研究』第11号.

Show, C. R., 1930, *THE JACK-ROLLER: A Delinquent Boy's Own Story*, The University of Chicago Press. (井井眞樹十・和田寛記, 1998, 『ジャンク・ローラー——ある非行少年自身の物語——』, 東洋館出版社)

Sugden, J., 1987, 'The Exploitation of Disadvantage,' in J. Horne, et al. (eds), *Sport, Leisure and Social Relations*. London, Routledge, 187-209.

——1996, *Boxing and Society: An International Analysis*, Manchester University Press

Wacquant, L.J.D., 1992, 'The Social Logic of Boxing in Black Chicago: Towards a Sociology of Pugilism.' *Sociology of Sport Journal* 9 (3): 221-54

——1995, 'Pugs at work: bodily capital and bodily labour among professional boxers.' *Body and society*, 1, 1: 65-93

Weinberg, S and Aroud, H., 1952, 'The Occupational Culture of the Boxer.' *American Journal of Sociology*, 57: 460-9

Whyte, W. F., 1955, *Street Corner Society*, Chicago: University of Chicago Press. (和田寛大・有田典三訳, 2000, 『ストリート・コーナー・ソサエティ』, 有斐閣)

Liebow, E., 1967, *Tally's Corner: A Study of Negro Streetcorner Men*, Boston: Little, Brown and Co. (村上直文訳, 2001, 『タリーのコーナー 黒人下層階級のエスノグラフィ』, 東信堂)

The Sociology of a Boxing : By Analyzing a Structure of a Boxing Gym

IKEMOTO Junichi

Recently, in sports and urban sociology, a considerable number of studies have been made on boxing. Unlike earlier studies, this paper analyzes the production of boxing subcultures by focusing on the relationship between gyms and their environments. It confirms that the gym is a very important institution for analyzing boxing subcultures and makes the following points:

- 1) Focusing on the relationship between boxers in the gym and young men in the ghetto, this chapter reviews how the recruitment system in the ghetto works to reproduce the low status of boxers.
- 2) The relationship between the gym and the street, this reviews that motivations for entering the gym include protection from street violence and getting a place to show off masculinity. These functions make the street and the gym symbiotic opposites.
- 3) By focusing on the relationship between the gym and the ring, this chapter makes clear that boxing has aspects of social service and exploitation, they are made by the boxer farming system and boxers' everyday working life.

Finally, this paper criticizes past boxing studies have not reflected relationship between urban poverty and boxing. It insists cross-cultural analysis is indispensable to a new flexible perspective on boxing.

Key Words

Boxing, Gym, Urban poverty, International comparative studies.